10月14日

2016年度商学部専門科目「経営史」
第２回「歴史とは何か，新たな歴史学の登場」

本日の目標

前回は，本授業の狙い，評価方法等を説明し，現在の企業経営は「危機」ではないか，その要因を歴史的に探る必要があり，本授業があることをお話した。なお，本授業を通じて，受講生の皆さんには歴史的な方法に接し，一つの分析手法として獲得していただくことをも目標としている。そこで，今回は歴史的な方法の理論的な面をお話し，今後の具体例を検討する際の準備とする。

講義内容

１前回の復習/２本日の授業内容

１　前回の復習

本授業の評価方法の説明

出席点，レポート点，試験点等

３冊のレポートテキスト→生協書籍部においていただけるように依頼しています。

白井隆一郎（1992）『コーヒーが廻り世界史が廻る』中公新書

藻谷浩介・NHK広島取材班（2013）『里山資本主義』角川oneテーマ21

丸川知雄(2013)『チャイニーズ・ドリーム』ちくま新書

本授業の狙い

企業経営の「危機」とは何か…日本社会による企業経営に対する認知の低下

因果関係を把握し，変化の歴史的意味をつかむ

⇒歴史とは何か，歴史的方法とは何か，実は現在「流行」している歴史学の１分野とは何か，へ

本授業の評価方法の説明

２　本日の授業内容

2.1キーワード/2.2歴史について/2.3グローバル・ヒストリーの登場/2.4それでは経営史は/2.5参考文献

2.1　キーワード

歴史的事実/歴史家の主観/認識対象の相対化/グローバル・ヒストリー

2.2　歴史について

2.2.1 歴史の目的

(1)過去の問題の「発掘」ではなく現在の問題の「解明」（資料１，テキスト５頁）

資料１

しかし,「現在の問題の解決といっても、当面の個別的問題にたいする具体的解決策を示すことが現代史の課題ではありません。現代史の役割は、医学にたとえますと臨床でなく病理学のそれに近いといえます。病理学には治療の処方箋を書く実用性は求められないのですが、病理発生のメカニズムの解明はそれにまつほかありません。病理が出番になるのは、臨床では診断・治療できない難病・奇病においてです。現代史も、個々の問題にたいする処方箋を書くことはできませ

ん。それがなしうることは、現代の病理の解剖、その発生のメカニズムの解明に役立つことです。現代史への関心は、時代が経験則や既成の枠組みでは説明不可能な変化を経験する、しかもそれを例外的にでないと実感するとき、とりわけ高まる」のである。「価値体系、制度原理のような基本的枠組みの安定性が揺らいでいるという感覚がひろくひとをとらえるとき、私たちは過去にむけて、あるいは、これまで自明とみなしてきたものの歴史的根源に向けて、『なぜ』という問いを発するのです。『既知』が『未知』に転化する」のである（渓内、1995、30 頁）。

そして，「本当の意味の歴史というものは、歴史そのものにおける方向感覚を見出し、これを信じている人々にだけ書けるもの」である。というのは，「私たちがどこから来たのかという信仰は、私たちがどこへ行くのかという信仰と離れ難く結ばれております。未来へ向かって進歩するという能力に自信を失った社会は、やがて、過去におけるみずからの進歩にも無関心になってしまう」（Carr，1961，邦訳 197 頁）からである。しっかりとした未来志向を持って初めて過去の歴史にも目を向けようとする。だからこそ，私たちは過去の事例から教訓を得ようとしたり，「現在」までのプロセスを丹念に探ることで，なぜ「現在」のようになったのかをつかもうとするのである。

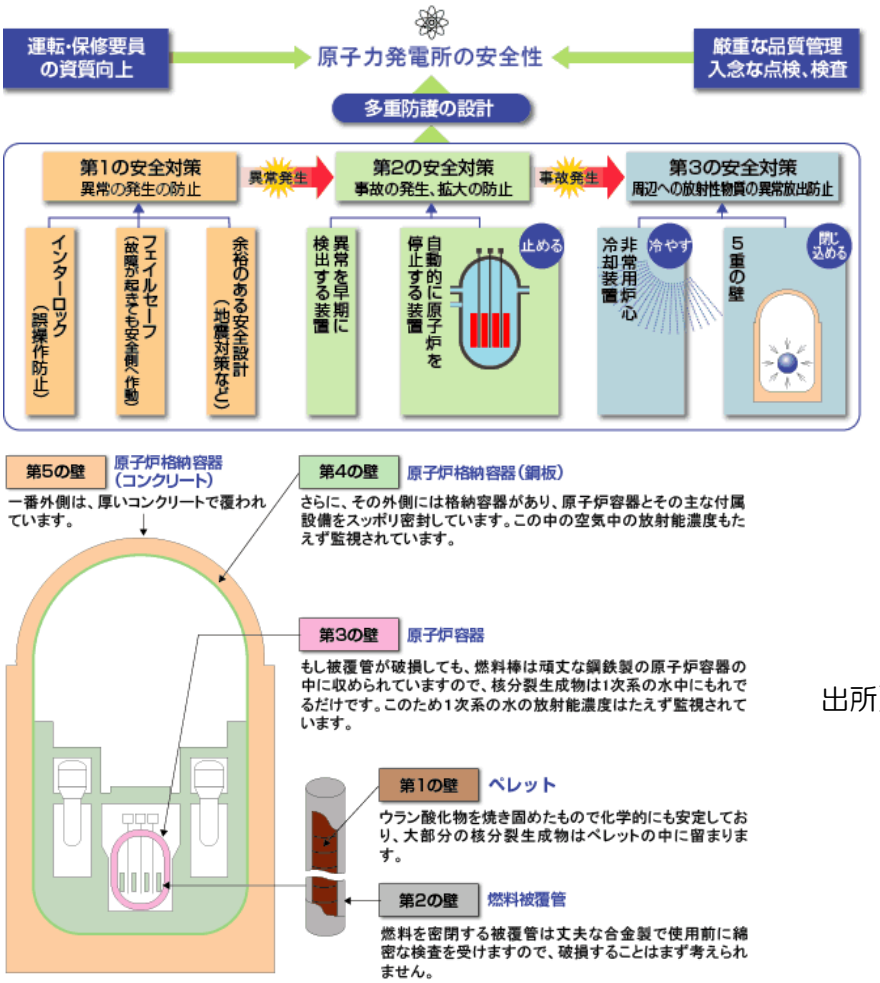
基本的枠組みの不安定化で，「既知」から「未知」への転化

2.2.2　「3.11」後の原子力発電所に対して

Before

安全確保，「5 重の壁」（資料 2）→「安全神話」で東電福島第 1 原発に津波対策せず

資料 2



出所）九州電力（2016）。

After

認識の転換…原子力発電に対するスタンスの厳しさ，原子力発電所 30 ㎞圏内自治体からの異議申し立て（DVD）」

⇒「未来志向」

2.2.3　歴史家の役割

「発見」し，「感じた」ことを…[主観]
意味あるものとして
未来への展望を含む
適切な流れをもった
「歴史的事実」=ストーリー　の提示…(2)「事実の羅列」ではない

※それだと起こってしまわないとわからない→問題発見の必要

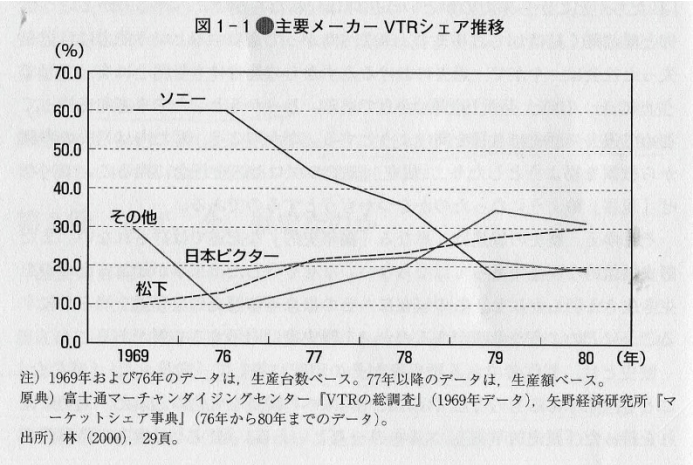
製作者ごとの異なるストーリーの登場…(3)主観と主観の争い

1 つの出来事に対する異なった立場からの異なったストーリー

VTR をめぐる複数の企業のストーリー

「逆転」のビクター，「再生」のソニー，「キャッチアップモデル」の松下電器(現在のパナソニック）(図 1-1 テキスト６頁，ＤＶＤ)

図 1-1



2.2.4　歴史の科学性

(4)製作者の「主観」で左右される歴史は科学たりうるか

教訓を得ようと一般化を図るもの

自然科学のように繰り返しは起こらないが，科学たりうる

⇒歴史学は科学性をどのように担保するのか

認識者によると認識対象との相対的な距離の確保(資料 3)

特に難しい現代史の場面

自らも目撃者，関係者…現実を受け入れられるのか→「否定史観」「未練史観」の恐れ

資料３

現代史では認識者が認識対象との間に距離をとりにくい、という場合の「距離」とは、空間的・時間的距離のことではなく、精神的意味での距離です。出来事からの時間的距離が短いこと、メディア技術の空前の発達が出来事との空間的・時間的距離観を一変させていること、それらが対象にたいする認識者の精神的距離を大きく左右していることは日常的に経験するところですが、本来的には、ここでの「距離」とは、認識者が対象にたいして持つ知的・心理的距離の感覚のことです。/一般に、認識、その成果としての知識は、理性（概念的思考の能力）の働きなしでは（それがすべてではありません）成り立ちえません。理性の働きは、認識対象をつきはなして（つまり精神的距離をおいて）観察するという、非情なあるいは冷めた態度を前提とします。…歴史家の思考は、ある出来事の「結果」、歴史家を「なぜ」という問いへと誘う「結果」を所与のものとし、それを出発点として「なぜ」の解答を求めてより遠い過去へと遡及する一面をもちます…ところでこうした思考と記述の手順が成り立つためには、思考の出発点でありまた終着点でもある出来事を、たとえ歴史家の党派的・道徳的観点から見て到底容認できないものであっても、一応完結したものとして（それは宿命論に陥ることでは毛頭ありませんが）受け入れる用意がなければなりません。もし決着がついたものとして受け入れないなら、あるいは対象である出来事を客観化できないなら、その因果関係の客観的な分析はできなくなるからです。（渓内、1995、213-4、217-8 頁）

◎求められる「有意味の因果の連鎖」（資料 4，テキスト 8 頁）

偶然，運命には頼らず，(5)適切で合理的なストーリーの構築

…同じ立場からの歴史的事実の優劣

資料 4

「歴史家は過去の経験から、それも、彼の手の届く限りの過去の経験から、合理的な説明や解釈の手に負えると認めた部分を取り出し、そこから行為の指針として役立つような結論を導き出す」（Carr，1961，邦訳 152 頁）のである。

⇒「真実」の提示へ，社会において緊張関係を生み出すもの

※現在のグローバル化した社会における，とても「元気な」歴史学の登場…グローバル・ヒストリー

2.3　グローバル・ヒストリーの登場

2.3.1　グローバルヒストリーについて

①扱う時間が長い…有史以前の人類誕生から

②対象となるテーマが幅広く，その空間が広い…ユーラシア大陸やインド洋世界

従来の一国史を超える

③異なる諸地域間の相互連関，相互の影響に留意

グローバルなモノの移動に注目(資料 5，図 1-2，1-4，テキスト 10 頁)

図 1-2

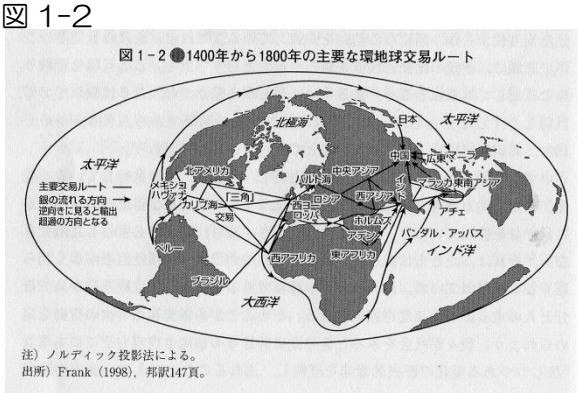
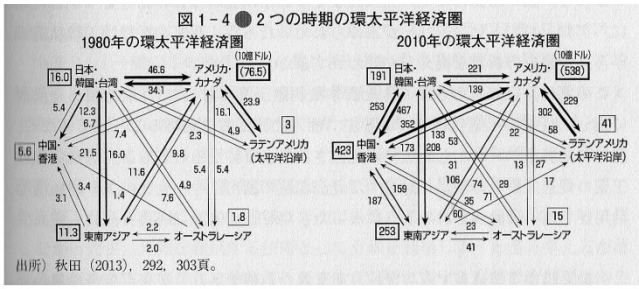


図 1-4



④従来の歴史学では扱われてこなかった対象，テーマ

疾病，環境，人口，生活水準など日常に近く，しかし社会全体，歴史変動のあり方全般に関するもの（DVD）

⑤従来の歴史叙述の中心にあったヨーロッパ世界の相対化，近代以降の歴史の相対化を意識

「東アジアの奇跡」，特に世界経済において中国，インドの占める位置の増大

…「経済的再興」という理解(テキスト 11 頁)

⑹ヨーロッパの近代化を相対化…ヨーロッパの発展は単なる「ユニーク」なもの

2.3.2　なぜ，グローバル・ヒストリーが求められたのか

⑺多様なあり方をいかにして理解するのか（資料 6，テキスト 12 頁）

現在のグローバル化からの視点

「既知」から「未知」へと転化した現代をどのように理解するのか

資料 6

それでは，なぜ，グローバル・ヒストリーが求められたのだろうか。それは，アメリカにおいて多様なあり方を理解しようとしたことからその必要が高まった。「グローバル・ヒストリーへの動きが最初に登場したのは，皮肉なことに，自国以外の地域の歴史に関心を持って世界史教育をしてこなかったアメリカにおいてである」。それは，「現在のグローバル・ヒストリーの旗手の一人であるマクニールが『西洋の勃興―人類の歴史』を出版し，それがベストセラーとなった 1963 年からのことであるという。マクニールに加えて地域間の歴史の重要性を示したホジソンや，アナール学派を代表するブローデルらの影響を受けた歴史を教える教師や研究者たちは，地球上の空間を分断してしまうことによって歴史の動きが見えなくなってしまうことの問題点に気づき」，「公民権運動がさかんになり，非白人移民が大量にアメリカ社会にはいり込み，あるいはアメリカがアジアをはじめとした非欧米世界の政治により深くかかわるようになるなかで，さまざまなかたちでの異文化接触と文化衝突の体験からでてきた動きと関連した事態であった」(水島，2010，80-1 頁)。

つまり，長い時間の中で，先入観なく多様な現在の世界の動きをつかむために，グローバル・ヒストリーが求められたのだろう。現実の多様性，現状認識から，世界史の新たな捉え方が問われてきた。

2.4　それでは現在の経営史は

「たそがれ」

経営史研究者の危機感

…大学教育における経営史の「地位低下」？

「学生の『歴史離れ』や経営学部・経営情報学部の実用志向が続くなかで，経営史学はいかにしてレーゾンデートル（存在理由）を明確にすべきか」（橋川、2012、10-11 頁）

経営史そのものに問題はなかったのか

2.5　参考文献

九州電力（2016）「原子力発電所の安全対策」http://www.kyuden.co.jp/notice_sendai3_safety.html，2016/10/14/渓内謙（1995)、『現代史を学ぶ』岩波新書/橋川武郎(2012)『歴史学者　経営の難問を解く』日本経済新聞出版社